どんぐりと山猫　宮沢賢治　スライド①

スライド②
　おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

かねた一郎さま　九月十九日
あなたは、ごきげんよろしいほで、けっこです。
あした、めんどなさいばんしますから、おいでんなさい。

とびどぐもたないでくなさい。
　　　　　　　　　　　　　　　　山ねこ　拝

　こんなのです。字はまるでへたで、も がさがさして指につくくらいでした。けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそっと学校のかばんにしまって、うちじゅう とんだりはねたりしました。

スライド③
　ねにもぐってからも、山猫のにゃあとした顔や、そのめんどうだという裁判のけしきなどを考えて、おそくまでねむりませんでした。
　けれども、一郎がをさましたときは、もうすっかり明るくなっていました。おもてにでてみると、まわりの山は、みんな たったいまできたばかりのように うるうるもりあがって、まっ青なそらのしたにならんでいました。一郎はいそいでごはんをたべて、ひとり谷川に沿った こみちを、かみの方へのぼって行きました。

スライド④
　すきとおった風がざあっとくと、の木はばらばらと実をおとしました。一郎は栗の木をみあげて、
「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかったかい。」とききました。栗の木はちょっとしずかになって、
「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ。」と答えました。
「東ならぼくのいく方だねえ、おかしいな、とにかくもっといってみよう。栗の木ありがとう。」
　栗の木はだまってまた実をばらばらとおとしました。

スライド⑤
　一郎がすこし行きますと、そこはもうふきのでした。笛ふきの滝というのは、まっ白な岩ののなかほどに、小さな穴があいていて、そこから水が笛のように鳴って飛び出し、すぐ滝になって、ごうごう谷におちているのをいうのでした。
　一郎は滝に向いてびました。
「おいおい、笛ふき、やまねこがここを通らなかったかい。」
　滝が ぴーぴー答えました。
「やまねこは、さっき、馬車で西の方へ飛んで行きましたよ。」
「おかしいな、西ならぼくのうちの方だ。けれども、まあも少し行ってみよう。ふえふき、ありがとう。」
　滝はまたもとのように笛を吹きつづけました。
スライド⑥
　一郎がまたすこし行きますと、一本の ぶなの木のしたに、たくさんの白いきのこが、どってこ どってこ どってこ と、変な楽隊をやっていました。
　一郎はからだをかがめて、
「おい、きのこ、やまねこが、ここを通らなかったかい。」
とききました。するときのこは
「やまねこなら、けさはやく、馬車で南の方へ飛んで行きましたよ。」とこたえました。一郎は首をひねりました。
「みなみなら あっちの山のなかだ。おかしいな。まあもすこし行ってみよう。きのこ、ありがとう。」
　きのこはみんないそがしそうに、どってこ どってこと、あのへんな楽隊をつづけました。
スライド⑦
　一郎はまたすこし行きました。すると一本のくるみの木のを、がぴょんととんでいました。一郎は すぐ手まねきしてそれをとめて、
「おい、りす、やまねこがここを通らなかったかい。」とたずねました。すると りすは、木の上から、額に手をかざして、一郎を見ながらこたえました。
「やまねこなら、けさまだ くらいうちに馬車でみなみの方へ飛んで行きましたよ。」
「みなみへ行ったなんて、とこで そんなことを言うのはおかしいなあ。けれども まあもすこし行ってみよう。りす、ありがとう。」りすは もう居ませんでした。ただ くるみのいちばん上のがゆれ、となりの ぶなの葉がちらっとひかっただけでした。

スライド⑧
　一郎がすこし行きましたら、谷川にそったみちは、もう細くなって消えてしまいました。そして谷川の南の、まっ黒なの木の森の方へ、あたらしい ちいさな みちがついていました。一郎はそのみちをのぼって行きました。榧の枝はまっくろに重なりあって、青ぞらは一きれも見えず、みちは大へん急な坂になりました。一郎が顔をまっかにして、をぽとぽとおとしながら、その坂をのぼりますと、にわかにぱっと明るくなって、眼がちくっとしました。そこはうつくしいいろの草地で、草は風にざわざわ鳴り、まわりは立派なオリーブいろの かやの木のもりでかこまれてありました。
スライド⑨
　その草地のまん中に、せいの低いおかしな形の男が、を曲げて手にをもって、だまってこっちをみていたのです。
　一郎はだんだんそばへ行って、びっくりして立ちどまってしまいました。その男は、片眼で、見えない方の眼は、白くびくびくうごき、上着のようなのようなへんなものを着て、だいいち足が、ひどくまがってのよう、ことに そのあしさきときたら、ごはんをもる へらのかたちだったのです。一郎は気味が悪かったのですが、なるべく落ちついてたずねました。

「あなたは山猫をしりませんか。」
　するとその男は、横眼で一郎の顔を見て、口をまげて にやっとわらって言いました。
「山ねこさまは いますぐに、ここにって おやるよ。おまえは一郎さんだな。」
　一郎はぎょっとして、一あしうしろにさがって、
「え、ぼく一郎です。けれども、どうしてそれを知ってますか。」と言いました。するとそのな男は いよいよ にやにやしてしまいました。
「そんだら、はがき見だべ。」
「見ました。それで来たんです。」
「あのぶんしょうは、ずいぶん下手だべ。」と男は下をむいてかなしそうに言いました。一郎は きのどくになって、
「さあ、なかなか、ぶんしょうがうまいようでしたよ。」
と言いますと、男はよろこんで、息を はあはあして、耳のあたりまでまっ赤になり、きもののえりをひろげて、風をからだに入れながら、
「あの字もなかなかうまいか。」とききました。一郎は、おもわず笑いだしながら、へんじしました。
「うまいですね。五年生だって あのくらいには書けないでしょう。」
　すると男は、急にまたいやな顔をしました。

「五年生っていうのは、五年生だべ。」その声が、あんまり力なく あわれに聞えましたので、一郎はあわてて言いました。
「いいえ、大学校の五年生ですよ。」
　すると、男は またよろこんで、まるで、顔じゅう口のようにして、にたにた にたにた笑って叫びました。
「あのはがきは わしが書いたのだよ。」
　一郎はおかしいのをこらえて、
「ぜんたいあなたはなにですか。」とたずねますと、男は急にまじめになって、
「わしは山ねこさまの馬車だよ。」と言いました。
　そのとき、風がどうと吹いてきて、草は いちめん波だち、別当は、急にていねいなおじぎをしました。

スライド⑩

一郎はおかしいとおもって、ふりかえって見ますと、そこに山猫が、黄いろなのようなものを着て、緑いろの眼をまん円にして立っていました。やっぱり山猫の耳は、立ってっているなと、一郎がおもいましたら、山ねこはぴょこっとおじぎをしました。一郎もていねいにしました。
「いや、こんにちは、きのうははがきをありがとう。」
　山猫は ひげをぴんとひっぱって、腹をつき出して言いました。
「こんにちは、よくいらっしゃいました。じつは おとといから、めんどうなあらそいがおこって、ちょっと裁判にこまりましたので、あなたのお考えを、うかがいたいとおもいましたのです。まあ、ゆっくり、おやすみください。じき、どんぐりどもがまいりましょう。どうもまい、この裁判でくるしみます。」山ねこは、ふところから、のを出して、じぶんが一本くわえ、
「いかがですか。」と一郎に出しました。一郎はびっくりして、
「いいえ。」と言いましたら、山ねこはおおようにわらって、
「ふふん、まだお若いから、」と言いながら、マッチをしゅっとって、わざと顔をしかめて、青いけむりをふうときました。山ねこの馬車別当は、気を付けの姿勢で、しゃんと立っていましたが、いかにも、たばこの ほしいのをむりにこらえているらしく、なみだをぼろぼろこぼしました。
スライド⑪

そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるような、音をききました。びっくりしてんで見ますと、草のなかに、あっちにもこっちにも、いろの円いものが、ぴかぴかひかっているのでした。よくみると、みんなそれは赤いずぼんを はいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でもかないようでした。わあわあわあわあ、みんななにかっているのです。
「あ、来たな。のようにやってくる。おい、さあ、早くベルを鳴らせ。今日はそこが日当りがいいから、そこのとこの草をれ。」

やまねこは巻たばこを投げすてて、大いそぎで馬車別当にいいつけました。馬車別当も たいへんあわてて、から大きなをとりだして、ざっくざっくと、やまねこの前のとこの草を刈りました。そこへ四方の草のなかから、どんぐりどもが、ぎらぎらひかって、飛び出して、わあわあわあわあ言いました。

　馬車別当が、こんどはを がらんがらんがらんがらんとりました。音はかやの森に、がらんがらんがらんがらんとひびき、のどんぐりどもは、すこし しずかになりました。見ると山ねこは、もういつか、黒い長いの服を着て、らしく、どんぐりどもの前にすわっていました。まるでのだいぶつさまに さんけいするみんなの絵のようだと一郎はおもいました。別当がこんどは、を二三べん、ひゅうぱちっ、ひゅう、ぱちっと鳴らしました。

スライド⑫
　空が青くすみわたり、どんぐりは ぴかぴかして じつにきれいでした。
「裁判ももう今日で三日目だぞ、いい加減に なかなおりをしたらどうだ。」山ねこが、すこし心配そうに、それでもむりにって言いますと、どんぐりどもは口々に叫びました。
「いえいえ、だめです、なんといったって頭のとがってるのがいちばんえらいんです。そしてわたしがいちばんとがっています。」
「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです。」
「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいからわたしがえらいんだよ。」
「そうでないよ。わたしのほうが よほど大きいと、きのうも判事さんがおっしゃったじゃないか。」
「だめだい、そんなこと。せいの高いのだよ。せいの高いことなんだよ。」
「しっこの えらいひとだよ。押しっこをしてきめるんだよ。」もうみんな、がやがやがやがや言って、なにがなんだか、まるでのをつっついたようで、わけがわからなくなりました。そこでやまねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんとこころえる。しずまれ、しずまれ。」
　別当が むちをひゅうぱちっと ならしましたのでどんぐりどもは、やっとしずまりました。やまねこは、ぴんとひげをひねって言いました。
「裁判も もうきょうで三日目だぞ。いい加減に仲なおりしたらどうだ。」
　すると、もうどんぐりどもが、くちぐちに云いました。
「いえいえ、だめです。なんといったって、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。」
「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。」
「そうでないよ。大きなことだよ。」がやがやがやがや、もうなにがなんだかわからなくなりました。山猫が叫びました。
「だまれ、やかましい。ここをなんと心得る。しずまれしずまれ。」
　別当が、むちをひゅうぱちっと鳴らしました。山猫がひげをぴんとひねって言いました。
「裁判も もうきょうで三日目だぞ。いい加減になかなおりをしたらどうだ。」
「いえ、いえ、だめです。あたまのとがったものが……。」がやがやがやがや。

　山ねこが叫びました。
「やかましい。ここをなんとこころえる。しずまれ、しずまれ。」
　別当が、むちをひゅうぱちっと鳴らし、どんぐりはみんなしずまりました。山猫が一郎にそっと申しました。
「このとおりです。どうしたらいいでしょう。」
　一郎はわらってこたえました。
「そんなら、こう言いわたしたらいいでしょう。このなかでいちばんばかで、めちゃくちゃで、まるでなっていないようなのが、いちばんえらいとね。ぼく お説教できいたんです。」
　はなるほどというふうにうなずいて、それからいかにも気取って、のきもののを開いて、黄いろの陣羽織をちょっと出してどんぐりどもに申しわたしました。
「よろしい。しずかにしろ。申しわたしだ。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちゃくちゃで、てんでなっていなくて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。」
　どんぐりは、しいんとしてしまいました。それはそれは しいんとして、まってしまいました。
　そこで山猫は、黒い繻子の服をぬいで、額のをぬぐいながら、一郎の手をとりました。別当も大よろこびで、五 六ぺん、をひゅうぱちっ、ひゅうぱちっ、ひゅうひゅうぱちっと鳴らしました。

やまねこが言いました。
「どうもありがとうございました。これほどのひどい裁判を、まるで一分半でかたづけてくださいました。どうかこれからわたしの裁判所の、判事になってください。これからも、葉書が行ったら、どうか来てくださいませんか。そのたびにお礼はいたします。」
「承知しました。お礼なんかいりませんよ。」
「いいえ、お礼はどうかとってください。わたしのじんかくにかかわりますから。そしてこれからは、葉書にかねた一郎どのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございますか。」
　一郎が「ええ、かまいません。」と申しますと、やまねこは まだなにか言いたそうに、しばらくひげをひねって、眼をぱちぱちさせていましたが、とうとう決心したらしく言い出しました。
「それから、はがきの文句ですが、これからは、用事これありに付き、出頭すべしと書いてどうでしょう。」
　一郎はわらって言いました。
「さあ、なんだか変ですね。そいつだけはやめた方がいいでしょう。」
スライド⑬

山猫は、どうも言いようがまずかった、いかにも残念だというふうに、しばらくひげをひねったまま、下を向いていましたが、やっとあきらめて言いました。
「それでは、文句は いままでのとおりにしましょう。そこで今日のお礼ですが、あなたはのどんぐり一と、のあたまと、どっちをおすきですか。」
「黄金のどんぐりがすきです。」

　山猫は、の頭でなくて、まあよかったというように、口早に馬車別当に云いました。
「どんぐりを一升早くもってこい。一升に たりなかったら、めっきのどんぐりもまぜてこい。はやく。」
　別当は、さっきのどんぐりをますに入れて、はかってびました。
「ちょうど一升あります。」
　山ねこの陣羽織が風にばたばた鳴りました。そこで山ねこは、大きく延びあがって、めをつぶって、半分あくびをしながら言いました。
「よし、はやく馬車のしたくをしろ。」白い大きなきのこでこしらえた馬車が、ひっぱりだされました。そして なんだか ねずみいろの、おかしな形の馬がついています。
「さあ、おうちへお送りいたしましょう。」山猫が言いました。二人は馬車にのり別当は、どんぐりのますを馬車のなかに入れました。
　ひゅう、ぱちっ。

スライド⑭
　馬車は草地をはなれました。木やがけむりのようにぐらぐらゆれました。一郎はのどんぐりを見、やまねこはとぼけたかおつきで、遠くをみていました。
　馬車が進むにしたがって、どんぐりはだんだん光がうすくなって、まもなく馬車がとまったときは、あたりまえの茶いろのどんぐりに変っていました。そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなって、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持って立っていました。
　それからあと、山ねこ拝というはがきは、もうきませんでした。やっぱり、出頭すべしと書いてもいいと言えばよかったと、一郎はときどき思うのです。

スライド⑮